

松本陽正 『『異邦人』研究』（広島大学出版会、2016年3月）

本書はカミュ『異邦人』に関する研究書である。本論は九つの章で構成されている。第一章と第二章では、『異邦人』に先行する二つの習作（「ルイ・ランジャー」と『幸福な死』）との関係について検討する。第三章では、『異邦人』の形成過程を詳しく検証する。その後、作品世界に入る。第四章では、作品の構造、語り手の現在、タイトルの意味、語りの技法について論じる。第五章では、主人公ムルソーについて考察し、「男」のモラルの規範に忠実な男という側面とく考える男という側面の重要性を指摘する。第六章では、「小柄な機械人形」を中心にその他の作中人物たちについて述べる。第七章では、メインテーマ（＝不条理）がいかによりイメージ化され提示されているのかを、殺人の場面、裁判、さらには死刑判決後の死との対峙をとおして検証する。第八章では、『異邦人』における太陽と海とについて、テーマティックなアプローチを試みる。最後に、第九章では、スタンダール『赤と黒』とサルトルの短編「壁」とを対象作品とする比較文学的アプローチを行う。

このように本書は、先行する習作との関係、形成過程研究、緻密なテキスト読解・分析による作品世界の提示、テーマティックなアプローチ、比較文学的アプローチといったさまざまな角度から総合的に『異邦人』を考察し、正確に読み解こうとする試みであり、紙幅の関係上詳細かつ具体的に述べることはできないが、たとえば『異邦人』の執筆時期や主人公ムルソー像などについて〈定説〉を見直す新たな説を提出するなど、従来の『異邦人』解釈に変更を迫る指摘を多々含む専門的な研究書である。とはいえ、フランス語を併記した箇所もあるが、引用文はすべて日本語に訳出した。フランス語を学んでいない『異邦人』ファンにも理解していただきたい、と思ったからだ。本書によって、広く一般的には、小説を読み解く面白さの一端を示しえたのではないかと考えている。

（著者自身による紹介）

